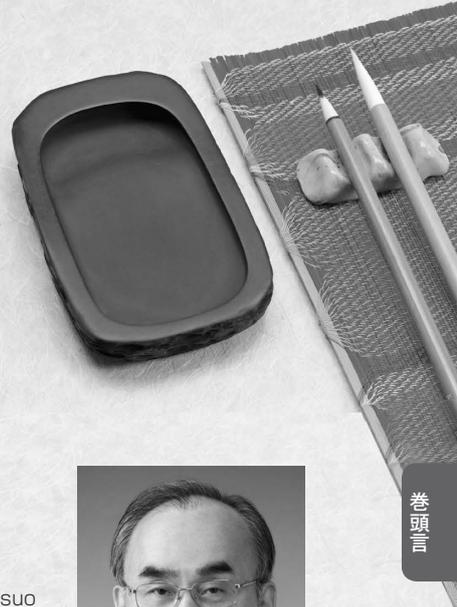


化学教育 徒然草



なぜ化学へ

SAWAMOTO Mitsuo

澤本光男

中部大学総合工学研究所 教授
代表理事・常務理事，国際交流委員会 委員長



巻頭言

定年の折「なぜ化学へ」と何度か聞かれた。『化学と教育』誌に阿るわけではないが、優れた理科教育と優れた師に巡り会えたためと思う。ここでは幼い頃の追憶を述べる。

先立っては父の影響もあるかもしれない。父は理系とは正反対の経理の教諭だったが、折に触れ自然科学の本を与えてくれた。例えば、小学生の頃の『天文の図鑑』には、今見ても新鮮な月着陸船が描かれ、これが昂じて宇宙や航空が趣味となった。その後、高校生用の参考書『精説化学』が届き、片道1時間の電車通学の間に、格好をつけて読みふけた。

中学に入ると「第一理科」という化学と物理をまとめた科目があり、山上智男先生と巡り会った。この先生は、脱線が多い魅力的な授業に加え、毎回初めに元素記号を即答するクイズをして、出来の悪い生徒には手首にしっぺをされたため、密かに「しっぺの山上」と呼ばれた。大らかな時代で、これを誰も「体罰」とは思わず、自然に元素や原子への親しみを深めた。愛読書『化学のドレミファ』（中学生と「ダルトン先生」との会話形式の入門書）を紹介されたのもこの頃で、これからモルの概念などをいつしか学んだ。

先生が監督された「第一理科クラブ」に参加したのも、化学（そして多分研究）に向かう機会となった。当時（1960年代）井戸をもつ家庭は稀ではなかったが、一理クラブでは、近隣の家庭にお願いして、月に一、二度の「地下水の水質検査」を活動としていた。筆者ら部員は、硝酸銀の滴下瓶などを収めた木箱をもって、これらの家庭を巡回し、軒先での定性分析の集計結果を学芸会で発表したりした。夏休みには、当時の先進的教科書『ケムスの化学』の訳本を手渡され、「鉄くぎの腐食と酸」という自由研究をさせてもらった。これも学芸会で発表した。最初の単独口頭発表となった。勝手に「上（がみ）さん」とも呼んだ先生に、この小文を読んでいただけないのは寂しい。

「青春は忘れ物、振り向いて気がつく」という歌詞があるが、今さらながら、このような教育や恩師に恵まれた幸運を思い、これまでの自らの漫然とした講義や教育を思い返すとき、もっと早くこの僥倖に気づけばと悔いるときがある。せめてこれからの人材育成の糧としたい。

[連絡先]

487-8501 愛知県春日井市松本町 1200 (勤務先)